

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520252

研究課題名(和文) 明治・大正期の中産階級読者から見た漱石文学の「新しさ」に関する構造的研究

研究課題名(英文) A Structuralist Study of the "Modernity" of Natyume Soseki;s Literatyure as Viewed by Moddle Class Readers in the Miji and Taisyo

研究代表者

石原 千秋 (ISHIHARA, CHIAKI)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：00159758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：明治30年代の読者が馴染んでいて、なおかつ礎石文学と共通点を持つ女学生小説と家庭小説と漱石文学との違いを明らかにした。

第一は、漱石文学の女性主人公は女学校を卒業して以降の女性の運命を書いたものであって、彼女たちは恋愛や結婚生活において自らを「謎」の存在とすることで、男性との関係において主体性を確保したこと。第二は、漱石文学は明治31年に施行された明治民法を意識して書かれており、これは「家族小説」と呼ぶべきで、山の手に形成されつつあった新興の中間層に父権的資本主義下の近代家族の質を提示し続けたことである。

研究成果の概要(英文)： In this study I have demonstraed the difference between Soseki;s iterature and th e domestic novels and novels featuring schoogiris that readers were familiar with at the end of the ninete enth century,and which share some traits with his fiction. First, the lives of the famale protagonsts in S oseki;s literature are portrayed after they have graduated from singl-sex schools, in which they secure an independent identity for themselves in ther relationships with men by presenting themselves as "enigmas" in their romantic engagements and maririages. Second, Soseki was conscious of the Meiji Civel Code when h e wrote about families, and he presented in these novels-wihich shoud proprely be regarded as domestic novels the modern Japanese family undre the paternalistic.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：夏目漱石 新しさ 読者 女学生小説 家庭小説

1. 研究開始当初の背景

(1)「漱石文学はいまも新しい」というような言い方がよくなされるが、この言説を可能にしているのは、第一に、明治維新以降日本が輸入して現代まで影響力を保っている近代思想が漱石の文学に反映されているからであり、第二に、当時、漱石文学の中心的な享受者だった都市中産階級が現在の大衆の原型をなしているからである。「朝日新聞」は、明治30年後半に中産階級の住むエリアだった東京の山の手をマーケットにして発展した。その高級紙としてのイメージ戦略の中心が、当時東京帝国大学教官にして有望な「新人作家」でもあった夏目漱石を専属作家として迎えることだった。夏目漱石はその戦略に忠実に作家活動を行った。

(2) 漱石文学が、当時としてはまだ珍しい家族形態だった核家族を書き続けたことや、女性を男性と拮抗する存在として書き続けたことは、「新しさ」の例としてあげることができる。家族の形を規定する民法の解説書や近代にける女性の生き方を指南した書物が続々と刊行されたのは、これらが「新しい思想」だったからである。

(3) 私は、これまでに新聞小説家である夏目漱石の文学が、大衆を読者としてどのように取り込んだのかを明らかにした(『漱石と三人の読者』講談社現代新書)。漱石は作家として、第一に、彼の文学サロン「木曜会」に集まった東大出身の超エリート門下生たち、第二に、新興中産階級を中心とした朝日新聞の読者、第三に、漱石の小説を読みもしないが、話題にするような読者(?)に向けて小説を書いたと考えられる。本研究で中産下級読者というのはこの中の第二の読者層である。これは、本研究の対象となる読者の質の設定である。

(4) この時代の大衆的言説の中心的な関心は、この世の中には男と女がいるという、今では当たり前すぎて忘れられてしまっている問題だということがわかった。これは、当時の言い方では「両性問題」という。漱石文学は女性を主体としながらこの「両性問題」に触れることで、「新しさ」を感じさせただろう。

2. 研究の目的

明治期になって輸入された「現代思想」がどういう言説で当時の「朝日新聞」の読者層、すなわち誕生期にあった大衆(都市の中産階級)に与えられたかを分析することで、当時の読者にとって、前近代の思想だけでなく、明治・大正期の「現代思想」にも精通していた漱石文学の何が「新しさ」として見えていたのかを構造的に明らかにするところにある。これは「新しさ」という基軸から明治・大正期を捉え直すことであり、また大きな地殻変動が起き始めている現代とはどういう時代かを浮かび上がらせることでもある。

3. 研究の方法

漱石文学の「新しさ」を明治30年代の文学、とりわけ家庭小説と女学生小説との比較において漱石文学の「新しさ」を明らかにしようとする。さらに、漱石文学の「新しさ」を小説の技法や言説のあり方からも分析する。漱石文学の記述のスタイルは、同時代においては「くどい」とか「作者が解説している」とか「テーマが分裂している」などと批判的に語られることが多かった。しかし、漱石文学の言説は近代人の内面を書くために「新しい」局面を開いた。漱石文学が内面を書く言説の「新しさ」を分析する。

4. 研究成果

明治四〇年、漱石が朝日新聞入社第一作を書くに当たって気になっていた小説があった。それは、少し前に『朝日新聞』のライバル紙『読売新聞』に連載されて好評を博した小栗風葉『青春』(明治三八年三月五日～明治三九年一月一日)である(平岡敏夫「『虞美人草』と『青春』」『漱石研究』第十六号、翰林書房、二〇〇三・一〇)。「青春」は、明治三十年代に入ってから急増しはじめた女学生への世間の関心を背景に書かれた小説で、その少し前にやはり『読売新聞』に連載された小杉天外『魔風恋風』(明治三六年二月二五日～九

月一六日)同様、一世を風靡する女学生小説となっていた。漱石の小説には、これら女学生小説を意識していた形跡がある。

『魔風恋風』『青春』と『虞美人草』のどこが違ってどこが同じなのか、二つの女学生小説と女学生のその後を書いた『虞美人草』とを比べてみよう。はじめに、共通点から見ておこう。

小杉天外『魔風恋風』。自由恋愛はそれだけで十分「墮落女学生」の資格を持った。当時として、初野の死は「墮落女学生」に与えられた「自然」な結末だった。つまり、「読者の期待の地平」をみごとにこなぞっていただろう。

もう一つ確認しておきたいのは、初野が徹底して典型的な女学生として語られていること、そして初野が徹底して見られる存在として書かれていることである。その後も読者は、登場人物同士の「噂」を通して初野を読むことを強いられるので、初野が受け身の女性であるかのような印象を持たれてしまうのである。

小栗風葉『青春』。『青春』の場合は、主人公の小野繁と恋人の学生関欽哉との関係は妊娠と墮胎にまで発展するが、『魔風恋風』以後の女学生小説としてその程度までのエスカレートはやむを得なかったのだろう。ちなみに、初野も繁も地方出身で、上京して東京の女学校に通う女学生だった。その意味で、登場したその時から「墮落女学生」の資格が与えられていたと言える。

こうした点を踏まえれば、『魔風恋風』も『青春』も、女学生という文化記号とそれにまつわる同時代言説の水準にピッタリ寄り添った構成を持った小説だったと言える。「読者の期待の地平」を決して裏切らない小説だったわけだ。この二つの小説が「通俗的」と評価されることが多いのも、こういう理由によっている。

漱石『虞美人草』が『青春』を意識していた徴はいたるところに見出すことができるが、たとえば『青春』の主人公の名は関欽哉で、『虞美人草』の主人公の名は甲野欽吾であることなどは、そのはっきりした現れだろう。また、『青春』の欽哉と繁が関係を持つ場所は大森となっているが、『虞美人草』の藤尾が小野と既成事実を作ってしまったおとして選んだ場所も大森だった。これを、平岡敏夫は『青春』からの「引用」と呼び(前出「『虞美人草』と『青春』」)、塩崎文雄は「大森行きは若い男女のトレンドだった」ことを明らかにした上で、

大森行きの主唱者も、小野さんではなく、藤尾だったことは誰の目にも明らかだとして、「藤尾が自らすすんで小野さんに「純潔」を捧げる決意を固めての、乾坤一擲の大博奕だった」と述べている(前出「女が男を誘うとき」)。

こうした徴の中で、漱石が『青春』を意識した最もはっきりした徴は、『虞美人草』では、「見られる女」ではなく、あえて「見る女」を主人公に選んだことではないだろうか。言うまでもなく、藤尾である。あたかも繁が欽哉を突き放して見るができるようになった『青春』の最後の場面を受けて、女学生のその後を書いたかのように読むことができるのだ。つまり、女学生小説の流行を横目で睨みながら、それを批判的に取り込んで書いたのが『虞美人草』ではなかったか。だから、藤尾は「見られる女」ではなく「見る女」でなければならなかった。

藤尾に見られる男は、皆藤尾の目の力に負けるのである。もちろん、藤尾も見られはするし、比べられもする。たとえば、京都の宿で小夜子を見かけた宗近は、甲野に「別嬪かね」と聞かれて「ああ別嬪だよ。藤尾さんよりわるいが糸公より好い様だ」と答えるのである。藤尾はただ見られたり

はしない。「美人」という武器を最大限に生かして、父の決めた人ではなく、自分で夫を選び取ろうとするのだ。

「藤尾は己の為にする愛を解する。人の為にする愛の、存在し得るやと考へた事もない。詩趣はある。道義はない」と規定される藤尾は、受け身ではなく主体的であって、当時社会から求められていた女性像とはほど遠い人物なのである。これが、最後に藤尾が自死する結末までをも規定していると言っても過言ではない。近代以降、統計上は女性の自殺は男性の自殺よりもかなり少数なのだが、誤解を恐れずに言えば、自死することが可能だった藤尾の登場は、『虞美人草』がまちがいなく「ポスト＝女学生小説」だったことの証だったと言えるだろう。

『三四郎』もまちがいなく「ポスト＝女学生小説」だと言える。先の明治三〇年代に書かれた二つの小説テキストとは二つの点で異なっている。一つは、美禰子に関する記述が典型的でないということである。これは、そもそも三四郎が「類型」を知らないことを読者に伝えるためになされた記述だからという事情もあるだろうが、そのために事実として美禰子が類型化から免れたことは否定できない。

もう一つは、三四郎視点から記述されたために、美禰子の「肉体」に読者の関心が集中するように書かれていることである。三四郎の視線は美禰子のセクシュアリティをこれだけ収奪しながら、実際には肉体的な接触はほとんどないまま終わる。そして、三四郎は淡い「失恋」を経験する。つまり、三四郎が触れるのは類型としての女性ではなく、個としての美禰子なのである。それが、『三四郎』を「ポスト＝女学生小説」たらしめている要因だ。

やや無責任なジャーナリズムが垂れ流す「記号としての女学生」には慣れていても、

類型でない女性に触れることには、「ポスト＝女学生小説」時代の多くの読者も慣れていなかったのではないだろうか。現実問題としても、「女性」は明治になって男性的言説にとっての「他者」として「発見」されたと言っていい。東大構内の池の端ではじめて美禰子に出会った三四郎が口にしたのは「矛盾だ」という一言だった。この言葉は正岡藝陽『婦人の側面』（新声社、明治三四年四月）の「女は矛盾の動物なり」という言葉と遠く響きあっている。「謎」、「矛盾」といった漱石テキストが女性について語る言葉の向こうには、こうした「他者としての女性」を読む新しい「読者の期待の地平」が広がりはじめていたのである。それこそが近代の刻印を帯びた「ポスト＝女学生小説」における「読者の期待の地平」だった。

女学生の読み物の一つが明治三〇年代に流行した家庭小説だった。家庭小説は、当時の言葉で言えば、「婦女子」を主な読者として想定していた。それは、次のような言説が女性に降りそそがれていたことと根は同じことだった。

嗚呼、スウキート、ホーム、女性的なるスウキート、ホーム、之実に女子が活動すべき唯一の舞台なり、女子よ、願くは他に立脚の地を求めんとする勿れ、他に尚天分のあらんかと疑ふこと勿れ、唯スウキート、ホームを造らんことを希ふより外に寸毫も頭を痛むること勿れ。（佐藤竹蔵『婦人と家庭』南風館、明治三五年四月）

言うまでもなく国民国家論など及びもつかない地点から、しかし現実には明らかにその枠組から、まさに「スウキート、ホーム」という甘い言葉が女性に降りそそがれていたのだ。もう少し硬い言葉なら、池田糸太郎『新家庭』（読売新聞社、明治三六

年六月)が、「家庭は女子の王国なり」と高らかに歌い上げていた。そんな中で、家庭小説が読まれていたのである。本案ともいえるプレテクトがあるとは言え、荒唐無稽な筋立てながら最後は女性の徳によって家庭が丸く収まる筋立てを持つ、菊地幽芳の代表作『己が罪』(春陽堂、明治三三年八月～明治三四年七月)や『乳姉妹』(春陽堂、明治三四年四月)などは、こうした時代的な背景なしには流行した理由を考えることはできない。

こういう時代の中でも、たとえば女学生言葉やファッションや髪型の流行など、身体を基盤としたささやかな自由は許されてはいたが(本田和子『女学生の系譜』青土社、一九九〇・一〇)、家庭を離れた社会的な自由は女学生にはほとんど許されていなかったと言っている。卒業後に女学校卒業にふさわしい進路を得られない状況にあって、彼女たちにただひとつ可能だった自由は、自分で結婚の相手を決めることだけだった。当時恋愛は結婚を前提としたから、彼女たちが自由恋愛を選ぶのには、彼女たちの主体がかけられていたのだ。

しかし、明治三〇年代に女学生が自由恋愛を選べば、「墮落女学生」として小説の主人公にならなければならなかった。女学生小説が、墮落するか否かではなく、どのように墮落するかが「読者の期待の地平」を構成したのには、こういう時代背景があったのだ(前出「小杉天外『魔風恋風』の戦略」)。それは、ほんの少し前に『虞美人草』が抱えていた時代背景でもあった。明治四〇年代に入って書かれた『虞美人草』の女たち、藤尾も糸子も小夜子も、こうした雰囲気の中で明治三〇年代に女学校時代を過ごしたはずである。その意味で、『虞美人草』や『三四郎』は女学生のその後を書いた小説だったのである。『虞美人草』の藤尾も、『三四郎』の美禰子も自分で結

婚を決めようとした、あるいは決めた女性だった。それは、「ポスト=女学生小説」だと言うことができる。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)  
該当なし  
〔学会発表〕(計 件)  
該当なし  
〔図書〕(計 件)  
石原千秋、筑摩書房(筑摩選書)『近代という教養 文学が背負った課題』、2013年、総ページ数219ページ(単著)  
〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)  
該当なし  
名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)  
該当なし

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：  
該当なし  
〔その他〕  
ホームページ等  
該当なし

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
石原千秋(ISHIHAR chiaki)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号：  
00159758

(2)研究分担者  
該当なし ( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：